

04

障がい者総合支援センターにおける
商品開発企画Product Development Project
at the Comprehensive Support Center
for People with Disabilities

デザイン学科・非常勤講師
Department of Design・Research Associate

西野 圭一郎 Keiichiro NISHINO

1 商品開発企画の始動

2011年度より活動をしているSNP (Sustainable Nagoya Promotion/持続可能な都市なごやプロモーション)では、市民・市民団体・NPO・企業・行政が、一緒になり、4つのE(環境・経済・教育・社会的公正)の視点から考え、現在のなごやを改めて見直し、魅力を探り、名古屋学芸大学の学生を中心にツアーやイベントの企画、動画撮影・制作をしてきた。その活動の一環として2015年に行なわれ植木鉢ワークショップにおいて、豊田市の森林組合の木材を使用したところ、その森林組合の方の紹介で豊田市障がい者総合支援センターと関わりを持ち、本学デザイン学科の学生とともにセンター内の雑貨屋をリニューアルオープンさせる「雑貨プロジェクト」に参加することとなった。

豊田市で不要となった間伐材を使い、SNPで実践してきた環境問題への取り組みを継承しつつ、障がいのある方の活動の場を新たに広げることを目的とし、森林組合、地域企業、障がい者総合支援センター、大学との協力で商品開発企画を行なった。

1.1 センターの概要

豊田市障がい者総合支援センターでは、障がいのある方の自立や社会生活を支援しており、知的障がいのある方のための通所施設(生活介護事業所)や、重症心身障がいのある方のための通所施設(生活介護事業所)のほか、一般企業などに就職を目指す方に作業を通じて就労に必要な知識・技術を習得できるよう、個々に合わせたプログラムを作成する支援等を行なっている。

1.2 課題

センターでは障がいのある方のペースや目標に応じて様々な作業や創作活動を行っており、羊毛を使ったフェルト玉(写真1)、紙すき、パン生地を使った小物づくり、さをり織り等の作品をセンターで働く福祉施設職員とともに制作している。



写真1:羊毛を使ったフェルト玉づくりの様子

制作した作品はセンター内のブースで販売しているが、福祉施設職員ではどうしても商品として販売する上での「デザイン力」、「販売知識」、「加工技術」などが不足していることが現状であった。

2 デザインによるブランド、商品展開

まずはデザインで培った知識、技術を活かしたブランド作りからスタートした。ロゴデザインをセンターの利用者の描くイラストを使ったものにリニューアル(図1)し、新ロゴを使った値札、パッケージ、間伐材を使った看板等(写真2)を製作した。



図1: ロゴデザイン



写真2: 間伐材を使った看板デザイン/サイズ_850x330mm

商品は、「素敵だね。これって誰が作っているの」をキャッチコピーとして、作り手のことも知りたくなる仕掛けづくりを行いつつ、障がいのある方が作品づくりのために制作する材料(フェルト玉、さをり織り、紙すき)を使用した商品開発を企業の専門機器・技術と大学のレーザー加工機等の「加工技術」駆使して商品開発を行った。また、地域産業振興のため豊田森林組合とも連携し、地元豊田の間伐材を使用した。商品8種を第一弾として2016年10月に商品化し、センター内の販売ブースのほか、本学学生が名古屋城横にある柳原商店街にて期間限定でオープンさせた、空き店舗を活用した雑貨セレクトショップ「おみせつくります」でも販売を行った。



写真3: 商品①/フェルト玉を使った置物



写真4: 商品②/テープカッター_裏面



写真5: 商品③/コースター_革バージョン



写真6: 商品④/紙すきを使ったしおり



写真7: 商品⑤/さをり織りを使ったスカーフ留め



写真8:商品①/フェルト玉を使った置物_シリーズ展開



写真9:商品②/テーブルカッター_表面



写真10:商品③/コースター_さをり織りバージョン



写真11:販売の様子①/センター内「ZELKOVA」にて



写真12:販売の様子②/センター内「ZELKOVA」にて



写真13:販売の様子③/柳原通商店街「おみせつくります」にて

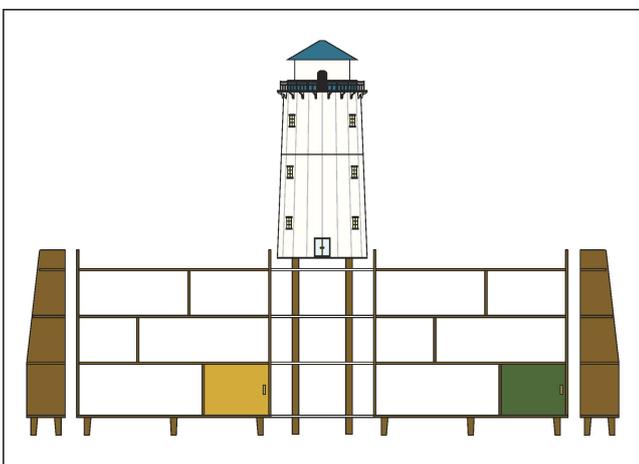


図2:現在製作中の新たな販売ブースのデザイン

3 今後の展開

今回は既にある作品、材料を使用して作業工程を主に学生が担ったが、障がいのある方の活動、雇用の場を今後広げる上では、作業行程を障害のある方と福祉施設職員のみで行えるようシステム、治具製作をユニバーサルデザインの観点から行う必要がある。現在、学生とともに実際に作品や創作活動をしている様子取材し、障がいのある方と福祉施設職員のみで量産できる「ぼち袋」の商品開発を企画している。

これまではセンター内で作られてきたぼち袋は、既成品のスタンプを使用して柄をつけているが、スタンプの種類を組み合わせでデザインすることが難しいという。また、現在使用しているスタンプは身体障がいのある方には扱いにくく、限られた方にしか使えないという問題点がある。そこで、作業工程と用具の見直しを行うこととし、デザインの面では、学生がスタンプの柄を背景、飾り、主題と分けて数種類制作し、誰がやっても素敵なデザインに仕上がるような組み合わせを考案している。作業の面では、身体障がいのある方でも版ずれを起こさずにスタンプが押せる専用の治具を設計している。また、スタンプ本体も丸みを帯びた取っ手にして職員が上から抑えても利用者の方が痛くならないよう設計し、試作を行っている。

4 まとめ

商品開発をして行く中で、デザインの力で見栄えを良くして量産体制を確立するのではなく、障害のある方々の、自分達が作った作品を「商品」として社会に受け入れられたい、認めてもらいたいという欲求をきちんと理解し、障害のある方だけでなく、センターで働く福祉施設職員の作業のモチベーションを上げることの重要性を感じた。今後は設計、試作した治具等を実際に試用してもらい、問題発見と解決を繰り返しながら、より使用しやすい治具とシステムづくりに協力して取り組んでいくこととする。